

正宗白鳥集

日本文学全集 12



筑摩書房

日本文学全集**12** 正宗白鳥集

昭和四十五年十一月一日発行

著 者 正宗白鳥

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

正宗白鳥集 目次

玉突屋	五	リー兄さん	二五
微光	八	人生の幸福	二四二
泥人形	望	安土の春	二六一
入江のほとり	六	光秀と紹巴	二六〇
死者生者	一〇三	トルストイについて	二九七
人さまざま	三五	ダンテについて	三〇六
生まざりしならば	三三	森鷗外について	三三八
ある日本宿	一六	夏目漱石論	三五
髑髏と酒場	二〇	内村鑑三	三四五
戦災者の悲しみ	三三	藤村論	四〇五
変る世の中	三三	我が生涯と文学	四一五
今年の秋	三七	欲望は死より強し	四四四

神
よ

四九

生きるといふこと

四六

一つの秘密

四九

年
譜

四七

人と文学

中村
光夫

四三

口絵写真撮影
高村
規

正宗白鳥集

日丰脱出

正宗の鳥

一

場所は輕井澤としていい。那須野ヶ原としていい。或は山中湖畔として差支へはないのである。時は戦時中の或夏のことである。數人の男女が女を忘れた女を樂しまつてゐた。企てたことがあつた。

女を忘れると云つて今日の時勢である。今日の人間である。彼等の夢見る力は高が知れ

玉突屋

「二本帰り三つ!」と、ボーイは虫の喰つた出つ歯を出して大声で叫んだ。彼れは薄い座蒲団の上に几帳面に坐つて、両方の袖を掻き合はせてゐる。年齢は十五六で、顔は青くて脹れて、髪の毛は薄い。

背広を着たでつぶり肥つた男は、台にすり寄つて身を屈め、鳥差しが鳥を狙ふやうな態度で、キューを突出した。「三つ!」と、ボーイは袖口から細い棒を出して、ゲーム盤を動かし、横を向いて欠伸をした。

向うの一台は突手もなく、四つの玉が佗しげに片隅に抱き合つてゐて、瓦斯の光は鈍いが、手前の一台は明るい光の下に、紅白の玉が追ひつ追はれつ縦横無尽にころがつてゐる。ストープを後に、キューを逆に突いて、帯を緩くだらしくしたまゝ立つてゐる角帽の青年は「又やられさうだな」と呟いて、相手の突振りを見てゐたが、急に後を顧みて、「中原、後で君ともう一度やらう」と力んで云つた。柱にもたれてワッフルを掴んでゐた中原は、時計を見て、「もう十二時ぢやないか、明日にしよう」と落着いた声で

云ふ。

「いや、明日は芝へ行つて、あの話を定めて来なくちやならん」

「なに、芝の方は急がなくてもいいさ」

「だつて早く定めなければ氣になつてならん、相手が愚図だから」

「急勝ちだね」と、中原はゲーム盤を見て、

「栗山さん、今日は全勝ですね」

「へゝゝゝ」と、栗山はキューを抜いてゐたが、コツツと音がして、手玉は外れたので、「こりやどうした」と、禿頭をつるりと撫でて、厭な笑ひをして、ストープの側へ来た。

「さあ、一キューで取切るか」と、角帽は勢よく立上り、チョークをギシ／＼付けながら玉台を見て、チエツと舌打して、「厭な玉だね」と、首を二三度捻り、「かう行つてかう来るか」と台の上に乗上つて、邪慳にキューを出した。兵児帯がだらりと垂れる。

「二つ」と、氣拔けのした声でボーイが呼ぶ。

「おい五だぜ、確かに見とれ、ゲーム取りならゲーム取りらしくするんだぜ」と横目でじろりとボーイを見た。

「五つ」とボーイは数へ直して、目をばつちり開けたが、次第に上目蓋が垂れて来る。生欠伸が喉を突いて来るのを漸く噛み殺したが、涙が目に浮ぶ。

角帽は眉を擡め、口を捻り、首を動かし、襟を寛くボタ

ンの取れたシャツの広く出てるのも関はず、熱心に突いてゐる。栗山は葉巻の先を爪でつまみながら、「玉は今時分からよく突ける、不思議なものだ、世間がしんとして来るとキューも冴えて来る」と、ストープに顔がほてつてゐる。

「ぢや、今夜は徹夜して突きますか」と、角帽はクシヨンの方を目で計つてゐる。ボーイは氣遣はしさうに栗山の顔を見てゐたが、栗山は「へい、徹夜も面白いので、明日は日曜だし」と、悪くすると徹夜案が成立しさうなので、幽かに溜息をついた。で、坐り直して足の痺れを撫り、ここへこの腹に力を入れ、「二つ」「三つ」と付元氣で叫んだが、頭は次第に下つてぼうつとすると、身体が地べたからする／＼と引上げられるやうな氣になり、そのまゝ遠い処へ持つて行かれさうになつたが、ガチャツと音がしたので目を細く開けて、「三つ」と夢心地で叫んだ。十二時が打つた。

栗山は火の熱で汗ばんだ手に白粉を振りかけ、立交つてキューを執り、「早いものだ、もう十二時だ。家に居りや、とても今時分まで起きてらりやしない」

「中原、昨夜の今時分はどうだい」と、角帽は意味ありげにや／＼と笑つてゐる。

「フ、ン」と、中原はコークスを指先で抓んで、ストープへ投げ込み、「お陰で今日は二時頃まで寝てしまつた」

「起きては玉を突き、飲んちや寝てりや、それで春は来るんだが、どうもかう玉突屋にばかり日参しても困るよ」

「いゝぢやないか、學問で食へなきやキューボーイになるさ、その方が洒落てるぜ、フツフツフツ」

「それも香氣でいゝね、しかし何時までもこんなことをして遊んでもゐられまいよ」

「良心が咎めるか。君やそんな事をちよい／＼考へ出すから、酒も玉も上達しないんだよ」

「さうだね、少くとも君を対で負かす程にならなくちゃ癪に触らあ」と、ワツフルの残りをむしや／＼平らげた。

「勝負有」とボーイは三人の顔を順々に見たが、北風が玻璃窓に吹きつけるので、音を聞いただけで首をすくめて、両手を前垂の下へ入れて背を丸くした。

「さあ、も一度」と、角帽は目を光らせて、玉を並べる。

ボーイは恨めしげな顔付をして、「栗山さん、も一ゲーム如何です」と哀れな声で云つた。

「もう遅いから止さうか」と、栗山は迷つてゐる。

「一時前か」と、ボーイは独言のやうに云つたが、角帽は帯を締め直して威勢よく、

「なあに、まだ十二時を十五分過ぎたばかりさ、十分もあればゲームになりますよ」と促すので、栗山は時計を見て、

「今二十分だね、ぢや、やるかな」とキューを執つて、「どうです、十位下げますかね」

「なあに大丈夫、今度負けたら玉はお止めだ」

「いや、君の止める／＼も当てにならんよ」と、中原は腰を掛けたまゝ足拍子を取つてゐる。ボーイはゲーム盤を直

して、「二つ」「三つ」「五つ」と数へ出したが、少し当りが途切れると、前に屈みさうになる。眠りをまぎらしたくも、軍歌も歌へず、足も動かせず、手も動かぬ。で、詮方なしに、齒を喰ひしぱり目を見詰め心を凝らしてゐると、かつとした目眩い光が前に拡がつて、青い台と白い玉と紅い玉とが、浪の上にも漂うてゐるかの如く見える。しかし、無意識に「二つ」「三つ」と叫んでゐたが、やがて口も目も緩んで、心がとろ／＼になり、自分の故郷で、弟を連れて繡眼児捕りに行つてゐる氣になつた。枝の上に緑の羽を重ね合つて、一処にビ／＼鳴いてゐる。で、鵜竿を持つて近寄らうとしたが、身体が縛られてゐるやうで近づけぬ。矢鱈に藻掻いてると、ズドンと音がして、鳥は飛んでしまつた。

「おい、吉公」と、角帽は怒鳴つて、「居睡りなんかしないでゲームを取れ、今までよく数へなかつたんだらう、声がしなかつた」

「いえ、数へてゐたんです」と、出鱈目に数を取つて、「十八ゲーム」

「ふゝん、いよ／＼取切るか」と、角帽はにこ／＼して台を廻つてゐる。

「さあ、それが済んだら、おれが最後の一击を与へて帰ることにしよう、もうそろ／＼眠くなつた」と、中原は欠伸をした。

夜番の拍子木が、地の底からのやうに幽かに聞える。

ボーイは、百年も千年も「二つ」「三つ」と繰返し／＼叫ばねば、打倒れて熟眠は出来ぬ運を背負つてゐるやうに感じて、涙声で「当りゲーム」

(明治四十二年一月)

微光

一

土用太郎——二三日降続いた涼しい雨も上つて、今朝は朝から日が暑く照つた。

お国は昨夕も寝そびれて、明方からやう／＼浅い眠に付いた。そして取留めのない不愉快な夢を見てゐた。目の醒めた時はもう九時に近い。急いで部屋の掃除を済ませて風呂へ行つた。時間を気にしながらも念入りに磨き立てた。

昨夕結つた銀杏返しを自分で取繕うて、顔は臘脂白粉で色取つた。二三の秘密の手紙を机の中から取出して細かく引破つた。一度部屋の内を見廻してから階下へ下りて、神さんに留守中の事を頼んで、若しも留守に旦那が遊びに来るやうだと、氣をつけて上げて下さいと、封筒に包んだ五十銭銀貨をソツと手渡した。

「お早くお帰んなさい。お家へもよろしく」と、神さんは門口まで見送つた。

其処から宿俤に乗つて、道々土産物を二包も買つて、切通の坂まで行つた。大和屋と看板の出でゐる小さい西洋菓

子屋の前で、車夫を呼留めて、店先で下りて、「姉さん」と声を掛けながら、店へ上つた。

「まあ国ちゃん」と、姉は仕事の手を休めて、呆れたやうに云つて、奥から妹を見詰めた。縮緬の羽織に羽二重の帯、あの縮緬のやうな着物に結かも知れんと思ひながら、「些とも来ないのね。どうしてるの、居所も知らせないんだもの」

「どうせ来月になつたら、引越さうと思つてるから」

お国は狭い板の間を通つて、茶の間へ入つた。箒筥の上の枕時計は丁度三時を指してゐる。四時の汽車にはまだ間があると思つて、少しは心が落着いた。団扇を使ひながら「姉さんは何時の汽車で行くの、私四時で行くのよ、姉さんは一緒にいけないでせうね」

「さう急に行けるものかね。本所の姉さんが明日の朝の汽車で立つと云つて来たから、私もその積りでゐるんだよ。国ちゃん明日にしたらどう？ どうせお母さんの病氣も今が今危ないといふんぢやなからうし、同じ事なら一緒に行つた方がいゝよ」

「だけど、私、今日でなくちや都合が悪いの。それに本所の姉さんと一緒に厭だわ」

「まだそんな事を云つてるの、お前も執念深いね」と、姉は汚点の多い顔に微笑を浮べて、「本所の姉さんも今は随分苦労があるらしいよ。彼処の兄さんも出世してお金が出来たものだから、道楽をして仕方がないんだつて、此頃も

浅草の芸妓を受出すとか騒いでるさうだよ」

「だつて、そりやあの姉さんが悪いからさ、夫の不身持は大抵女房が仕向けが悪いからですよ」と、お国は言葉強く云つて、姉の境涯きやうがいを小気味よく思つた。「よくあんなに吝しんにしてゐられるわね、今だつてさうでせう。あれほど吝にして御亭主に道楽をされるなんて、姉さんも器量物だよ」と嘲つた。二三年前に本所の姉が僅か三十円ばかりの金を立替へて呉れなかつた為に、自分が厭な男の妾になつて、それからます／＼浅間しい境遇に沈んで来たことを思ふと、今も尚口惜しくてならぬ。で、さん／＼にその姉の悪口を並べたが、此処の姉は向う鼻肩ひしやうばかりして、些ちとも同意しさうでない。それに忙しく立つたり坐つたりして、落着いて話も出来にくい。三錢五厘のお客にもお世辞を云つてゐる。「この商売もうるさいものだわね」と、お国は店の方を見て、「もつと氣の利いた商売をしたらどう？」

「お前が資本でも貸して呉れれば、何でも始めますよ」

「飲食店か何かだと儲けが多いでせう、洋食屋なんかいいわねえ。……私時々思つてよ。どうせ私は真面目に働く氣になれやしないんだし、かうして歳を取るばかりで、先の当てもないんだから、いつその事、吉原へでも身を売つて、その金を姉さんやお母さんに上げようと思ふことがあつてよ」

「馬鹿お云ひでないよ」

「だつて、私本気でさう思つてよ、どうせお女郎なんか私

には勤まりやしないんだけど、さうしてお金だけ取つといで、直ぐに自害して死んでしまふの」

「大変な覚悟ね」姉は笑つたが、「冗談は冗談として、お前も些ちとは真面目に考へなさい、姉妹でありながら、居所さへ分らないやうだと、私だつて心配だよ。今度故郷から来た端書だつて、わざ／＼よしやまで持つてつて、お前の所へ届けて貰つた位だもの。お母さんもどんなに心配してるか知れやしないよ」と、親身に意見するらしかつた。

「姉さん」と、お国は改つた調子で、「その話もう止して頂戴。そんな事を云はれると、私故郷へ歸りたくなくなるから」

自分の身の上の事は、薄ぼんやりの姉さんなぞに彼此云はれたくはない。真面目に考へてどうかなるものなら、馬鹿な私ぢやない、疾とづくにどうかしてゐる。で、早く姉の側を離れたくなつて、

「私、もう出掛けなくちやならない」と、時計を見て立つた。

「まだ早いよ、水でも飲んでからお出でな」

「私沢山……ぢや、彼地へ行つて、病氣の様子で電報を打ちますよ」と、忙しく暇乞ひして、店先へ出ると、姉は追駈けて来て、小声で、

「病氣が左程でなくつてもね、スグゴイと電報を打つてお呉れよ。さうでないと家を出憎くくつて仕様がなから」
「えい」

お国は首肯うなづいて俥くるまに乗つた。

二

上野の停車場に着くと車夫に風呂敷包を持たせ、謹つつしましやかに歩いて二等の待合室へ入つた。時間が早いから、手紙で打合せをして置いた河津さんはまだ来てゐないだらうと思つて、よく捜しもせず、周囲の視線を避けるやうにして、片隅に腰掛けた。そして二年前にその人と人目を忍んで、此処から大宮まで行つたことなど心に浮べて、あの時の樂しみを再び繰返したかつた。あの時は淡雪が降つてゐた。寒い風に吹かれながら相合傘あひあがさで宿屋まで行つた。火鉢に翳かげした河津さんの手の紅く膨ふくらんでゐるのが、可愛らしくも痛々しくもあつた。

と、お国は背に流れる汗をも、騒々しい物音をも忘れて、懐かしい思出に耽ひたつてゐると、今まで新聞台に身体を曲げて、据付の新聞雑誌を読んでいた男が、不意に頭を上げ、口元に微笑を湛たたへて側へ来た。「姉さんは来ないの」と柔なく声を掛けた。

「アラ」と口の内で云つて、お国は夢から醒めて、「姉さんは明日に延ばすんですつて」

「ぢや、却つて都合がいいね」

「ええ」

「切符はまだ買はないの」

「ええ、まだ」

「ぢや、僕が買つて来よう」と男は切符口へ行つた。

お国は横から男の姿を見詰めた。此間久し振に出会つて浅草公園を散歩した時には、夜だつた為か、何となく面裏おもてうられて萎しれてゐるやうに見えたが、今見ると、元のやうに凜りん凛りんしくて、顔に歳は取つてゐない。薄い髻むすを生やしかけてゐるのも却つて愛くるしく見える。新しい麦藁帽子、絞りの兵子帯、涼しさうな浴衣姿が似合はしかつた。

男は二枚の青切符を持つたまゝ、時間表を見たり、其処等をコツ／＼歩き廻つたりした。お国は目で男の後ばかり追うてゐた。

やがて両毛線行の改札口が開いた。男は女から風呂敷包を取つて、先に立つてプラットホームへ出た。人氣のない室やを見て乗つたが、其処へは後から老人が一人入つて来たばかりだつた。

お国は直ぐに羽織を脱いで、首筋の汗を拭うた。汽車が動出すと、冷しい風が窓から流込んだ。

「私、やう／＼落付いてよ」と、今まで圧おさへてゐた息を吐いた。胸は清々さうさしくなつた。東京が後／＼消えてゆくのが氣持がよかつた。かうして何時までも旅をしたいと思つた。

「僕も久振りの旅だよ、此頃は汽車に乗るのも珍らしい」と、男は向合つて窓際に腰掛けて、外を眺めながら、落付いて煙草に火を点けて、「突如突然にあの手紙を見て、どうしようかと一寸考へたよ。先日きりで会はん方がお互ひのた

めにいゝと思つて、今日は来まいかと思つたんだが、意志が弱くてとう／＼お伴をするやうになつちやつた」と笑つて、「どうせ姉さん達と一緒なら、他所ながら様子を見るだけだと思つてたら、誰も来なかつたんだね。お母さんの病氣はどんなのだい、さう悪くもないだらう」

「どうだか」と、お国はそれには冷淡に答へて、「ぢや、此間きり貴方はもう会はないつもりだつたの」と、これには力を入れて云つた。

「どうせ仕方がないんだもの。国ちゃんだつて、もう浮氣は止しちやつて、その何とか云ふ人に真心を持つてた方が身のためだよ。だから僕は会ひたくても会はんつもりだ。それに僕も学校を出たんだから、これから職業を捜さなくちやならんし、以前のやうにしちやゐられない」

「皆な私が悪かつたんだわね、私のために卒業も一年遅れたんだから……皆んな私が悪いんだから、これから又貴方に御迷惑を掛けて、出世の邪魔をしようとは、夢にも思つてやしないのよ。だけど、今日貴方に來て頂いたのは、この先何時お日に掛れるか分らないやうな氣がして、こんな折にでも緩くり会つて置きたいと思つたからだわ。浮氣浮氣つて、貴方に会ふのが何故浮氣なんぞでせう」

お国の氣色ばむのを男は押静めようとして、情愛を含んだ目を向けた。そして後の窓に肘を突いて、居眠りをしてゐる老人を憚るやうに、チラとその方を顧みた。

「昨日の貴方の手紙だけは破らないでチャンと持つてゐるの

よ」と、帯の間に小さく畳み込んでゐるのを取出して拡げて、「貴方一度読んで御覧なさい」

「自分の手紙を読む必要はないさ」と、男は手に取らうともしないのを、

「必要があるから云ふんですよ」と、無理に押付けた。

手紙はペンで書いてあつて、所々爪痕がついてゐる。男は半ばは真心、半ばは冗談のつもりで、一晚掛つて書いたその手紙を讀返した。先日の淺草の散歩の樂みから、過ぎし昔の思出を、字面の美しい文字で細かに書いてある。

「本郷座の側にて一時間余も待ちあぐみて、御身も何かの障碍にて家出もならぬことならんと諦め、失望して帰宿せんとする刹那に、御身の幽かなる声を耳に致し候。幽かなれどその声は小生の一生に耳朶を去らざる声にして、今孤燈の下鮮かに思ひ出され万感交々至り、一滴の涙なきを得ず候。深え渡る月光に浴して、湯島天神の境内まで、互ひに語らふ言葉もなく歩みて、其処にて一生の別れを告げ候ひしは、御身も尚お忘れならぬ事と存じ候。大宮の雪湯島の月、忘れ難き記憶は爾後屢々小生を悩ましもし慰めも致し候」

「あの時には己が罪をやつてたよ、僕はその絵看板を見ては悲しい思ひをしたのだ」と、男はその後暫らく生きる瀬もなく暮してゐたことを思つて、「国ちゃんは十日もしたら忘れちやつたらう」と、手紙を疊んだ。

「えい、十日どころぢやない、二日も立つたら忘れちやつ

た。私、薄情だから」お国は早口に云つて、再び手紙を開いて、「貴方よく読んで、その爪痕の所を」

「それがどんなのだい。真面目に将来の忠告をしてるんぢやないか」

「さう……」

お国は爪先で目印したあたりを注意して読んだ。其処には情深い、柔しい、涙を誘ふやうな文字が、濃く鮮かに浮んでゐる。——△△とかいふ親切な人を大木の蔭と頼んで、心安く日を送られるならば、小生の絶え間なき心掛りも稍心安んぜらるる次第なれば——なんて。

「貴方私が今気楽に日を送つてると思つてて」と、涙早い目をうるませた。

「今はそんな話は止さう」

男は湧上る感情を紛らすやうに快活に云つて、手紙をズタズタに引裂いて外へ棄てた。一片二片舞戻つて車の中へ落ちた。お国は黙つてシホくした目で男の顔を見てゐた。やがて汽車が大宮に着くと、かの老人は手鞆を下げて下りて、新に子供連れの夫婦が入つて来た。急に賑かになつた。妻君は座に落付くと先客の二人の顔を疑ひ深い目で見つた。お国も見ぬ風で見返した。

「サイダでも買はうか」男は独言のやうに云つて、前を通る売子を呼留めてサイダとお茶とを買つた。

「飲まないか」と、小さい茶碗を出したが、お国は軽く首を振つた。

汽車が動出すと、男は罎を口に当てて、生温くて酸ばいサイダを、不味さうに飲んで、手に持つたまゝ膝の上に置いた。お国はふと前に屈んで奪ふやうに罎を取つて、「私も呑みたい」と甘えるやうに云つて、口呑みにした。

「貴方、まだ呑んで？」

「もう沢山」

「ちや罎を捨てよう」と、お国は立つて窓に擦寄つた。百姓家の門に立つてゐる子守が此方を見た。重さうに荷物を背負つた男が線路を伝つてゐる。稲の葉は青々と風に戦いでゐる。異様の雲が空の片隅に巻上つてゐる。踏切の側で汽車の過ぎるのを待つてゐる俤には、厭らしく白粉を塗つた平顔の女が乗つてゐる。

幾度か罎を振つたが、お国は気遅れがして投棄て得なかつた。かの夫婦は笑ひながらその方を見てゐる。思切つて目を瞑つて手から離すと、線路で碎ける音が痛いやうに響いた。胸を轟かせながら座に戻つて、「物を壊すといゝ氣持ね」と、小声で云つた。

「ちや、その土瓶も壊すといゝ」男はお国が白い腕を出して物を振上げた姿を、再び見たかつた。

「だつてお茶は飲みたいから……私忙しくつて昼御飯も食べないの。お土産を開けようかしら。貴方食べたくない？」

「折角買つて来たのに手を付けちゃ悪いぢやないか」
「ウゝン構はない」

風呂敷包を解いて、菓子箱を開けた。五つ六つ最中を紙に包んで、側の子供にもやつた。

汽車は鉄橋を渡つた。馬を洗つてゐる農夫の赤い顔が直ぐ前に鮮かに見えた。首を振り／＼男の子が二人泳いでゐる。白壁を照らしてゐる光も最早暑苦しさうではない。

「瀟洒したい、所だね、何といふ川だらう」と、男が訊いた。

「これが思川でせう、私小さい時に見さんに連れられて来たことがあつてよ。此処では鮎が取れるの」

「ぢや、明日帰りに寄つて見ようかな、東京へは明日の晩帰ればいゝんだから」

「私も一緒に帰つてよ」

「だつて病氣見舞に行つて、さう早くも帰れんだらう」

「さうね……でもどうかして帰つてよ」と、お国は決めてしまつたが、「もう東京へも故郷へも行かないで、ズーツと遠方へ行つちまひたい」と、溜息吐いた。

日光は山にも野にも消えて、黒ずんだ森には淡い水気が細く棚引いてゐる。夕闇の中にチラホラ火影が見えた。

「あの町らしい所が栃木だね」と、男は窓から覗いて、

「広々として景色のよささうな土地だ」

「えゝ」お国は氣のない返事をした。

停車場から傳へ二人は晃陽館に向つた。大通の左右には軒毎に赤い提灯を点火して、人の往来が賑かだ。蓄音機を据ゑた店先にはいろんな人が群がつてゐる。「天王様のお

祭だらう」と、お国は思つた。

三

障子を取はづして風通しのよい宿屋の二階で、二人は湯上り浴衣を軽く着て、夕餐の膳に向つた。前の縁側を袴を着けた教員らしい人々が往来したが、どれも一度づつ不遠慮に二人を見た。隣には酒盛が始まつて、調子外れのザレ唄も聞える。女中がキャツ／＼と騒いでゐる。

「煩さいね、もつと静かな部屋はないかい」と、男は給仕の女中に訊いた。

「本当にお氣の毒で御座いますが、何処も塞がつて居りまして」と、手首に汗を浮かせてゐる女中が答へた。

「ぢや、隣が静まるまで、僕は町を散歩して来よう。国ちゃんはまだもう家へ行かなくちやなるまい。どうせ今夜は看護して上げるんだらうし」と、男はこれで別れるのを名残惜しがつたが、お国は、

「私、今夜は家へ行かない」と平気で云つた。

「病氣見舞に來たんぢやないんかい」

「だから明日になつたら、一寸行つて見るわ」

「呑氣だねえ」男は勝手な女だと思ひながら、却つてそれを喜んだ。

女中が膳を下げるのを待つて、お国は小声で、

「私、あの女中を一寸知つてよ、小さい時分に叔母の家の子守をしてたの。確かお鶴とかいふのよ」

「ぢや、向うでもお前を覚えてるだらう」

「どうだか。私は様子がちがつてるから知らないでせう、田舎にゐると何時までも同じやうだわね」と、心で田舎者を嘲笑つて、「あの子は一度居眠りしてて背中の子供を落つこととした事があるの。打どころが悪くて氣絶してそりや騒ぎだつたの」と云ひながらその時分を驕ろに思浮べた。シク／＼泣出したお鶴の顔や、吃驚して真蒼になつた、叔母の顔が見えた。あの時からあの子の額には傷跡が残つてゐたが、

「子供の折の傷は次第に大きくなるんですつてね、歳を取るほど」と、男に訊いた。

だが、男はそんな話には氣が向かない。生返事して、「もう大分涼しいから、其処等をブラ／＼しようぢやないか、隣が静かになるまで」と、身を起したが、お国は知人に会ふのを厭がつて、一足も戸外へ出ようとしなない。

男は一人で行つた。

お国は階子段まで男を見送つてから、暫らく縁側に立つて、土蔵の横から斜に町の方を見た。瓦斯の光で薄明るい店先に、肥つた男が素裸で煙草を吸つてゐる。その前を白い衣服や黒い衣服が続いて通つてゐる。月琴の音が陽気に近づいた。それを見たり聞いたりしてゐると、お国は今朝から引立つてゐた心が次第に弛んだ。この頃日増しに身体の衰へるにつれて、周囲の物の音、物の色が鬱陶しくなつて来たが、チラ／＼隣見する故郷の色は一層懶く見えた。

で、部屋へ入つて、検束なく坐つた。四年前、十六の春に踏出してから、一度も歸つても見ねば、殆んど音信にも接しなかつた故郷は、流石に懐かしくなつて、知人に他所ながら会つて見たかつた。つひぞ思出したことのない、幼友達の誰彼れが、影のやうに浮んだ。父と姉とに連れられて、勇ましく東京へ行つてからの四年間も、悪い夢に魘はれてゐるやうに、取留めもなく浮んだ。

早く河津さんが歸つて来て側にゐて呉ればと、身を持ちあぐんで其処へ俯伏しになつて目を閉ぢた。

店先に駄菓子等を並べた中野の百姓家の畳の上を、お安が涎を垂らしながら、ヨチ／＼歩いてゐる。本郷座の房州海岸の場では、高田の作兵衛が泣いて貰ひ子の素姓を話してゐる。河合の美しい環と、着飾つて実の子を訪ねて行く自分がつになつた。

「お母さんが抱つこして上げよう」と、梅月で買つた最中を見せても、お安は側へ寄つて来ないで、身体に触ると、声を張上げて泣出した。……

お国は膨らんだ手の甲を涙で濡らした。生んだばかりの可愛らしい子供を入手に渡して、泣いて絶付く自分を足蹴にした憎い／＼鈴木のお相が、其処へ現はれた。憎いよりも次第に恐ろしくつて溜らなくなつた。

四

「お前は東京へ行つて磨き上げたら、何処へ出しても恥か